

---

# 月と血の十字架

灰屑輝

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

月と血の十字架

### 【Nコード】

N4103J

### 【作者名】

灰屑輝

### 【あらすじ】

さまざまな種族が暮らすこの世界において、誰もが幸せに暮らせると言われる自由国家アルセシア。その最強の防衛部隊、AGに所属する少年、ヒュールの物語。あらすじ詐欺状態だったので少し書き換えさせていただいております。

## 一話 幸運と凶運（前書き）

この小説は、高校時代に作者が執筆していた四次創作小説を元に、オリジナル作品として加筆・修正を行ったものとなっています。設定展開等に多少の矛盾が生じている場合がありますが、ご了承ください。

## 一話 幸運と凶運

ここは、いわば剣と魔法の世界。  
とか言いつつ微妙に科学も進歩した世界。  
そんなこの世界でも最近は何事か情勢そのものが荒れている、と思う。

この世界には数種類の“人”がいる。

力や魔力が強く、高い戦闘力を持つ『魔族』。

知略と技術に長けた『人間』。

長い寿命と高い魔力を持ち、精霊に近い力を持つ『エルフ』。

知性とともに高い身体能力を誇る『獣人』。

翼を持ち、自在に空を駆ける自由民『翼人』。

非常に強い生命力と獣人をも上回る力を持つ『竜人』。

そして、神の使いと称され他種族をはるかに凌駕する魔力を持つ『天使』。

それらの『混血』の者も居る。

総じて高い能力を持つ一方、予想はつくだろうが嫌われる存在である。

かねてより種族同士の関係は複雑だ。

とはいえあまり争いなんか起こらなかった。戦職学校の歴史でも、

一般学校の歴史でもそう教わった。

この国、自由国家アルセシア。

首都アステイアートを中心とする共和国で、商工農林水産と大体の物が自国で生産できるだけの国力と、

他国の進出を許さない強力な軍事力を以って成立している。

そして最大の特徴。

世界中で唯一、すべての種族、また本来忌み嫌われるそれらの混血さえ、殆どの差別なく暮らしてゆける国。

反面、犯罪者や亡命者が多いこともあるが、そこはこの国と土地の懐の深さと内部治安維持隊のおかげで内部はそれほど荒れていない。この国の者は、大体すでに種族感の偏見なんて物は無くなっている。ここはそんな国。

だが、この数年は一体何なんだ？

魔族の中でも突然戦闘狂になる奴は出てくるし、

人間も他国を侵略しようとする奴が増えてきているらしい。

遠くの国のことは知らないが、この国にも驚異はしよっちゅう迫る。

今も目の前に広がる惨状。

敵と味方が入り乱れ、白刃と血飛沫が視界に常に映っていた。

大地に血を移す、戦死者を踏み越えて、戦いが続く。

都市全てが高い城壁と魔術的な結界、そして強力な軍隊に守られたアルセシアに戦争を仕掛ける国家は存在しないが、国家でない、己の快樂の為に殺戮と闘争を求める侵略者の襲撃と言うものは絶えない。

救いと言うのもおこがましいが、この場に立っているのも倒れているのも、非戦闘員は一人もないことだけは確かだった。国境近いこの地域は城壁の外側。人々の生活圏とは別の世界といえるだろう。

“ 戦場に出て、生きるか死ぬかは運だけで決まる ”

そんな言葉を聞いた事がある。

実際、それが現実。

仲間の一人から血飛沫が上がり、膝から崩れたのも現実なら、たった今刃を振るった敵方の戦士が直後電撃に撃たれ絶命したのも現実だろう。

そいつらは運が悪かったという現実。

今俺の目の前にある現実は、運の悪い奴の首を俺の剣が切り裂いた事だろうか。

俺の名前はヒュール。

歳は17、クラス戦職は黒魔騎士。

数年前にこの国に移り住んできた身の魔族だ。

所属は我がアルセシアの対外防衛を担当する、アサルトガードイアン突撃機動守備隊。通

称AG。

その第三部隊に籍を置かせてもらっている。

崩れるように倒れた目の前の敵。

振るって血を払ったカタール（正しくは“ジャマダハル”らしいけど）を握りなおし、次の相手に斬りかかる。

今日の敵となっているのは、戦闘狂になった魔族、いわゆる『悪魔』の一団。統率性など皆無だが、単体での戦闘力は高いものが多い。

さて魔騎士パラディンという戦職クラスは、弱者や仲間を守る盾となれる心身、そして剣と共に魔法の腕も必要と言われる。

剣はともかく、魔法が苦手な俺が、わざわざこの戦職クラスを選ぶ必要があったのかと思われるだろう。

事実、周囲も剣一本の騎士職で行くことを勧めていた。

ただ俺にも、

わざわざ黒魔騎士ダークパラディンを目指した理由くらいは持っている。

鈍い音が響く。

喧騒の戦乱の中、聞こえているのは俺と相手だけかもしれない。

「ちっ……!!」

両手のカタールを交叉させ、敵の武器を止めた体勢のまま、硬直している俺。止めていると言え、俺の肩口数センチのところにはすでに敵の刃が迫っている。

「クククククク。」

悪趣味な笑い声を上げる相手。何しろ、一瞬でも力を抜いたら、俺の心臓に刃が刺さる。相手の獲物は鎌。真っ直ぐ刺さればあの世逝きだ。

大体、奴は片手で鎌を持っている。それで俺と互角以上。明らかに格上。

「雑魚が梃子摺らせるな。」

空いているほうの右手に魔力を集中させやがった。

プレイングウィール

“燃え盛る大渦”。かなりハイレベルな火炎魔法だ。

流石に喰らったらやばい。

上からプレッシャーを掛けている鎌が俺をその場に釘付けにする楔となってしまうている。

鎌を跳ね除けられればいいんだろうが、相手の腕力はこちらより上。逃げ場は何処にある？

考えてる間に奴の右腕に火炎が渦巻いていた。

「死ね！」

「くっ……!!」

魔力を開放し、少しでもダメージを減らそうと集中しようとしたの

とほぼ同時。

ブルクレックとプロテクション

「流水の庇護”！！」

聞き慣れた燐とした声が耳に届く。瞬間、薄水色の波立つ光の膜が俺を包み込んだ。

大規模な炎の渦は俺を飲み込んだが、春の小川のような少しひんやりとした膜に熱と炎は遮られ身体には届かない。

相手の死を確信したのか鎌に込められた力が緩む。

刹那、

俺も炎から飛び出した。

「バカ、なっ！」

このバリアは対魔法専用で、物理的な防御力は皆無。炎を抜け、役目を終えた膜は流れ落ちるように消えていく。

ハードラック  
「凶運と踊れ……！」

深々と相手の鎧を突き抜け腹に刺さったカタル。相変わらずいい切れ味だ。

突き刺さっている右腕の剣に魔力を流し込む。

「……“爆裂する刀身”！！」

刃に伝わった魔力は変化し、爆発を起こす。

「ががああっ!?!」

体内からの爆発の衝撃で鎧にはヒビが走り、刃の刺さった傷口と口からは血が噴出す。

表情は、眼を見開いた驚愕のまま固まっていた。

完全に舐めてた相手の一撃で死ぬんだ、無理も無い。

剣を引き抜くと、どさりと崩れた。

中が見えなくて幸いだが内臓は間違いなくグチャグチャだろう。

今更のように汗がどっと流れ出た。

運が無ければ、俺に助けしてくれる仲間がいるという幸運が無ければ、地面に転がっていたのは俺のほうだ。

そんな身体を落ち着かせようと一つ深呼吸すると、同時に腕輪の力ラーストーンが青く光る。

撤退の合図だ。

「ごめん、さっきは助かった……」

後ろにいるであろう相手に、聞こえるように呟いた。

小さく、気取られないようにもう一度溜息を吐いてから振り向く。

俺の眼に映るのは、白いローブに身を包んだ一人の少女。

その手には、小柄な彼女には不釣り合いな長剣。

俺を助ける傍らで別の相手と戦ったのだろう、剣についた血を振り払っている。

同時に揺れなびく、銀色の髪。

丁度日も傾いてきていて、その光を浴びる銀髪はいつ見ても綺麗だった。

## 二話 AGと戦職

くるりと振り向いた、金色の瞳は俺を見て微笑んだ。

「ふふ、謝り癖は治りませんね、ヒュールさん？」

あ、しまった。

つい謝ってしまう。

少し考え、目の前の美しい少女に苦笑しながら言い直す。

「ありがとう。シエナ……また守ってもらおう事になったけど……」

「気にしないで下さい。」

笑顔で返してくれる、彼女はシエナ。

戦職はホワイトソーサレス。種族は人間に魔族の血の入ったクォーター。

俺とは戦闘学校で知り合って以来の付き合いだ。

学校での成績もほぼトップで、中の中ほどの成績をギリギリで維持していた俺とは大違い。

にもかかわらず、うちの隊では俺と組んでいる。

実力に保障がある、しかも美少女。

パートナーとしてこれ以上恵まれてる状況は無いと思うが、不釣合い感是否めない。

AGは非常にアバウトな部隊である。

俺もその一員だが、他国の軍と比べれば非常にでたらめだ。

おおよそ六十〜百人で一部隊を構成し、その中から部隊員の希望と

隊長の判断で二、三人の組に分かれ、戦闘を行う。

そして指示を出すのは一応隊長で、指示が無い時は大体各自の判断で動く。

と言っても、指示が飛ぶほうが稀なほど、各隊員に投げっぱなしな部分がある。

指示は各個人に配られているカラーストーンが告げる。

普段透明で、特定のパターンの魔力を浴びると変色する特徴を生かしたこれは簡易の合図が出せる。

突撃、待機、撤退、散開、召集。

これらの単純な命令が赤・緑・青・黄・紫と決まった色に対応しており、それを目印に判断する。

戦法は個人の自由。

大体、入隊条件は「実力さえあれば誰でもOK」的な物があり、色々な種族の奴が混ざっているし、戦職クラスもバラバラ。

短所を補い合うペアが組まれている事もあるが、気の合う仲間同士でつるんでいるほうが珍しくない。

要するに何でもあり。

AGの存在は、攻めてきた敵軍に一斉攻撃を仕掛け、その戦意と戦力を大幅に削るためにある。

隊の目的と、国の特色が相まって、非常に戦闘力は高い。

規模的には合計2000人前後（死人と辞職、そして怪我によって隊から離れる奴も多い）といったところだろうが、国最強どころか世界最強とか勝手に呼ばれてたりもするわけで、まあ、その一員としては少し嬉しい。

だがシエナのような実力者ならともかく、俺のような並の腕しかないような奴が入隊している事もおかしいのだが。

前述の「実力さえあれば」の理屈で考えるならば、俺は入る事も叶

っていないはず。

まあ、

一度気になったから部隊長に聞いてみた結果……

…… 同い年の従兄弟と間違えて許可されたと言う説も浮上した。

真相は違う事を祈りたいが、あながち間違いでもなさそうなのが困る。

国境付近の戦闘区域から下がり、俺の所属するAG第三部隊・通称“デイベインセイバー”と、同地域担当の第十五部隊・通称“スカーレットエッジ”は拠点である町、アリウスへと戻っていた。

ちなみに、部隊の通称は部隊長が就任後『好き勝手に』つける。その為代替わりのたびに名前も変わる。

今は宿舎の作戦室で、今日の報告が行われている。

部隊の損害は第三が重傷七名、第十五が死者一名重傷五名。

今回は危うく俺も彼らの仲間入りする所だった。

シエナに感謝だ。

……でも俺自身はあまり納得していない。

時間は適当に流れていき、外は真っ暗。

今は夕食も終え、自室に一人。

この国自体が潤っているためか、兵士の詰め所とは思えないほど宿舎は快適だったりする。

そもそも、一兵士一兵士に個室があてがわれている事も他所の国では考えられないだろう。

ベッドと机、あとはダンスや本棚程度の家具と小さいながらシャワー室……

まあ使っている身としては何の文句も無い。

本日は夜間の見回りの当番からは外れているので自室でのんびり……するほどの時間でもない。

すでに時計の短針は十一に迫っている。

宿舎に消灯時間はないが、次の日に寝坊するのもしよろしくない。

俺は外したコンタクトレンズを薬水に浸すとメガネをかけた。

昼の激しい訓練や戦闘では邪魔になりやすいが、寝るまでの時間を過ごすならこれで十分だ。

ベッドに寝転び、今日の事を思い返す。

「結局また助けられちゃったか……」

自分で言っただけでへこむ。

「なんだかなあ……」

寝返りをうって横向きに。

俺が騎士系の戦職クラスを目指したのは、非常に単純。

学生時代、一度思ってしまったことを実行しなかったからだ。

『シエナを守りたい』

んなことを思ったから、騎士系の道に進み今に至る。

そして戦職学校でシエナに会う口実として時々通っていた図書室で読んだ本の内容曰く、

【戦闘スタイルと魔法系統が真逆だとペアで戦うときはお互いの短所を補えるぞ】

ホワイトソーサラー  
【白魔術師と対になるのは黒魔騎士だ】

【二人の息がぴったり合えばあらゆる戦局に対応できる】

そんな聞いた事も無い出版社から出た本に書いてあったことを鵜呑みにして黒魔騎士ダークパラディンを志した。

それが、今俺がこの戦職クラスに就いている理由だった。

……こんな理由でも、理由は理由なんだよ。

結局、一緒にAG入って、同じ部隊になって……

一年以上が経った現在、俺が詩音を守れた回数いまだゼロ。むしろ守られた回数は今日のをに入れて……何回目だったか。

シエナは魔術師職にも関わらず、父の後を継ぎたいとのことで剣術にも長けている。

おかげで彼女も魔騎士パラディンに近く、二人とも攻撃担当になりうるわけで、実力のあるシエナのほうが、余裕のない俺のフォローまでしてくれるのは当然の流れではあった。

「駄目だな……俺は。」

溜息を吐く。

眠気もやってこないの、気晴らしになるかと思って起き上がって窓を開けて外を眺める。

昼も晴れていたし、星もよく見えるんじゃないだろうか。

「ん……？」

隣の部屋、シエナの部屋の窓が開け放たれていた。

俺達の部屋は一階にある。

防犯意識がしっかりしているシエナは夜になると部屋の窓は必ず閉めている。

「珍しいな。」

何かあったのだろうか？

そういえば、今日は陽が落ちてから俯きがちで、何か落ち着かない様子だった。

先月あたりも似たような状態のことがあって、その時に「何でもない」って言ってたから、気にも留めないでいてしまっていた。気分でも悪いのかもしれない。

寝る前に、一度様子を見に行こうかと窓から離れようとした俺。

だが、その前に俺の眼が何かを捉えた。

窓は宿舎の裏庭に面していて、その先はちょっとした林のようになっている。

その木々の間に、月明かりを浴びているのか何かが光るのが見えた。「シエナ……？」

何という確信もなかったが、妙に気になった俺はその光を近くで見ようと窓から外へと抜け出すことにした。

## 二話 AGと戦職（後書き）

表記上「シエナ」ですが、発音は「しえ・な」ではなく「し・え・な」のつもりです。文字にした際、見た目が良かったのでこちらを採用しました。

### 三話 満月と紅

夜ではあるが、外に出ると想像以上に暗さを感じなかった。宿舎の窓から灯が漏れたりもしているが、この明るさの源は天にある。

今宵は満月。

葉の間から漏れる月光が林の中まで照らしていた。

木立の奥を覗くと、ぼんやりと銀色に光る何かが見えた。

さつき窓から見たのと同じだろうか。

数歩進み、目を凝らす。

木々の間で、蹲ひざまっているのは、見慣れた後姿。

流れるような銀色の髪は、月明かりを浴びている事もあってか、何故か儂く見えた。

「…………シエナ？」

妙な雰囲気。

一歩一歩近づぐことに解る、彼女の様子。

呼吸が荒く、肩も震えている。

「…………ヒュール、さん…………」

近づいている俺に気付いたのか、苦しそうに呼ばれた。

「どうしたんだ？具合でも悪…………」

「逃げて…………！」

俺の声を遮るように、シエナが、必死な声を上げる。

伸ばしかけた手を、俺は止めてしまっていた。

何が起きているのか、俺にはまるでわからなかった。

ただシエナが苦しそうだ、それだけは感じているのに、ただ見ているだけしか出来ない。

「…………離れて、ください……………っ！！」

小刻みに震えていた肩がひときわ大きく跳ねた。

一瞬か数秒かわからないが、間をおいてシエナが立ち上がった。ゆらゆらとふらついたようにも、見えるが、言葉は出てこない。長い髪を揺らし、シエナがゆっくりと振り返る。

「……えっ？」

ずっと何も出てこなかった俺の口からやっと出てきたのは、そんな間抜けな呟きだった。

見慣れたはずのシエナの顔。

夜の闇に、月明かりを浴びた白い肌と銀の髪が映える。

だが、それ以上に目を奪われたのは……

紅。

シエナの瞳は綺麗な金色だ。

だが、何故か紅いと思ってしまった。

金色のはずなのに、紅い。

血を連想させるような深紅、それが金の瞳の底に光っている。

背筋に冷たいものが走る。

シエナの目元と口元が小さく歪む。

いつもと同じような、静かな笑顔。

同じはずなのに、何かが違う。

血も凍るような恐怖と、何故か魅力さえ感じる妖艶さ。

そんな不気味ともいえる感覚が、心の底に湧いていた。

次の瞬間、シエナの姿が消えた。

気配を捕らえるのとどちらが速いか、

俺の左側頭の角と、右の肩口にそっと手を添えられるような感触。

振り返ろうとしたとき、

ぷつり。と、

右首筋に何か突き刺さるのを感じた。

血が滲み出る。

続いて柔らかい感触が、今の痛みを包んだ。

状況を把握しようとした右目に映るのは、柔らかそうな銀の髪。ふわりと漂う香りも、シエナがいつも使っているシャンプーの香りだった。

聞こえるのは、こくん、こくん、と喉の鳴る小さな音。

出される結論は。

シエナが俺の首に噛み付いている。もとい血を吸い出している。

何故かと考えようとしても、頭が上手く回らない。

「……………んうっ……………」

時々息をつくように、聞こえる声。

「シ、エナ……………」

血を飲む音と、髪から漂う匂いは遠く、夢の中のようにも感じる。それでも、肩と角に触れる手の感触と、首に走る鈍い痛みが、これを現実だと教えていた。

酔っているような、浮いていくような、ぼんやりと、少し甘い感覚。ダメだ。

ゆっくり溶かされているように、意識が少しずつ霞んでいく……………

どれくらいの間が経ったか。

柔らかな感触が離れたことに気付くと同時に、俺はふらりと崩れる。両膝を地面について、左手も支えにしてなんとか倒れる事だけは耐える。

首筋の痛みは消えない。貧血時特有のたるさが身体にあった。

まだ止まらない血が、首から流れて行く感触だけはやけにリアルに

感じる。

現実には頭を戻そうとするが、怖い。後ろが振り向けない。背中越しのまま、後ろへ話し掛ける。

「シエナ……？」

「ふふつ。ヒュールさん、ごちそうさまでした……」

声はシエナだ。

笑い方も、いつもと同じ。

勇気を振り絞って、振り返る。

確かにシエナがそこにはいた。

しかし、

不自然に、魔族の俺よりも長く伸びた牙。

口唇から零れる俺の血、それをなめ取る仕草。

何よりも、金色の奥深くに底光りする深紅を湛えた瞳。

それらと、先ほどまでの行為から出る答えはひとつ。

『シエナは、“吸血鬼”<sup>ヴァンパイア</sup>である。』

「驚いてますね……」

「……あたり、まえだろ……」

「……」

「……」

何とも言えない、居心地の悪い空気。

シエナも、次の言葉が見つからないのか時々目をそらしている。

シエナが何かに気付いたように振りかえる。

俺もはつとして同じほうを向く。

近づいて来る靴音。色々といっぱいっばいの俺には中々気付けなかった。

「こんな時間に何をしてるんだ？ヒュール、シエナ。」

靴音の主が、木々の間の闇から姿を見せた。

「副長!？」

我が第三部隊の力ケル副部隊長。

そつえば見回りが来る事なんか頭に無かった。まずい。

どう説明するべきだろうか。

シエナの口から血が零れ、俺の首にはきつと牙の跡。

「どう言う事だ？」

副長が、腰に携えていた剣を抜く。

「逢引を楽しんでいた、という空気じゃなさそうだな。」

逢引、などと冗談めいたことを口にしながらも、その目は真剣そのもの。

半端な言い訳や口先の冗談では済ませてもらえないだろう。

いい案も浮かばないまま、俺はよろよると立ち上がる。

とりあえず、俺にもさっぱりわからない以上、もう一人の当事者に聞くしかないわけだが。

「シエナ……」

黙っているシエナの肩に触れようと伸ばした手。

だが、何故か肩のほうが離れていく。

歩き出したわけじゃない。

シエナの身体が、斜めに倒れていった。

慌てて支えようとするが、俺の足だつてふらついている。

一緒に倒れながらも、なんとか抱きとめる。

「痛つつ……シエナ？大丈夫か？」

声を掛けるが、反応なし。

「シエナ!？」

慌てて揺すろうとすると、いつの間にか傍に来ていた副長が俺の肩を掴む。

「え？」

「事情はよくわからんが、よく見る。」

副長に言われて、改めてシエナの様子を見る。

目を閉じてはいるが、さっき見たような震えや呼吸の荒さは見られない。

顔色も悪いようではないし。

というか、むしろ……

「……えっと、寝てるだけ？」

俺は何ともいえない疲れに襲われた。

溜息を一つ。

「……ここでもうしても仕方ないな。部屋に運ぶぞ。」

「あ、はい。」

正直まともに力が入らない俺の代わりに、副長がシエナを運んだ。自分が本当に情けなく感じる。

空を見ると、雲が出てきて月を覆っていた。

シエナの部屋のドアがぱたんと乾いた音を立て閉まる。

「副長、この事は……」

「大丈夫だ。事情を聞くまでは大事にはしないでおく。」

ほっと、つい溜息をついた俺に、副長が釘を刺す。

「ただし、明日ゼフィスと俺で事情は聞くから覚悟しておけよ。」

ゼフィス。デイヴァインセイバー第三部隊の部隊長。

つまり明日は隊長と副長直々に俺達を呼び出すつもりだろう。

「り、了解……」

ぎこちない返事をした俺の肩を一回叩くと、お前も早く寝るとだけ苦笑しながら告げると、副長は行ってしまった。

廊下を曲がる背中を見送ると、また溜息を吐いてしまう。

「やれやれ……」

明日の事を考えると、少々鬱にもなる。

でも、この件については俺もシエナから訊きたい事はかなりある。

そのついでだと思おう。

「……って、げっ!? もうこんな時間か……」

腕の時計を見るととくに日付は変わっている。

それなりに規則正しい生活を心がけているつもりなのに俺にとっては、痛い。

「全ては明日、いや今日か?」

そう呟いたのと同時に、大きな欠伸が出た。

眠いことは眠い、どこるか血を抜かれた分の疲労もあつてからさっさと寝られそうさだ。

自分の部屋に入る前に、隣の部屋のドアの前で一言。

「おやすみ……シエナ。」

### 三話 満月と紅（後書き）

ヒュール自身の外見についての描写が極端に少ないのですが、今回の話でも触れたとおり側頭部に一對の角があります。有角は『魔族』全体の特徴で、人間の血の濃いシエナには角は無い、という設定です。

## 四話 朝と剣（前書き）

非常に間が空きましたが、続きです。

## 四話 朝と剣

悪夢を見た。そのため目覚めは非常に悪い。

何しろ夢の中でシエナに襲われてた。

両手足が動かないくらい痛めつけられ、最後に首筋に噛み付かれる寸前で目が覚めた。

ふと、昨日の事を思い出す。

……首筋に噛み付かれたのは本当の事だったんだよな……後ろからだったけど。

信じられないが、悪夢の内容とどっちがまともなんだろう。

天井に目線を移しながら意味も無く考えを廻らせた。

普段目覚めはいいほうなのだが、今日はイマイチなかなか起きる気がしない。

しかし、起きないわけには行かず、上体を起こす。

「うっ……」

少し眩暈がする。そういえば、昨日輸血どころか止血もろくにしないで寝たんだったっけか？

……頭の中で責任は副長に押し付けておこう。

立ち上がったっても立ち眩みはあまり酷くない。

魔族の、と言うよりも俺自身の先天的な能力らしいが、比較的回復は早い。

髪の毛を手探りで整え、ようと思ったんだが、一応鏡を見ながら直すことに。部隊長に呼び出されるんだしな……

そして改めて、いや、初めて見る。

右首筋に残る、

牙の跡。

「夢なんかじゃあ、ないって証拠だよな……」

何ともいえない気分だ。  
時計を見ると、意外と早起きだった。  
当初の目的どおり、髪を直し、ついでにコンタクトを入れ、早朝の訓練のために部屋を後にした。

しかし歩いている分には大した事がないと思えたものの、いざ走ったりするとやっぱり身体は小さな悲鳴を上げている。仕方無しに早く切り上げさせてもうことになった。

元よりアバウトなAGまして第三部隊<sup>ディバインセイバー</sup>。

部隊の半分ほどしかこの早朝訓練には集まらない。

早引けすると言っても、簡単に許可された。

そもそも部隊長自体がこの訓練にいない。

だが、ただ寝坊したりしているというわけじゃないことは知っている。  
る。

一度だけ訓練の時間よりも前に、

ゼフィス隊長の姿を見たことがある。

あのときのことは、鮮明に思い出せる。

昨日シエナに会った林の更に奥深く、ほとんど誰も来ない広場がある。

広場とはいったものの、ただ木を数本切り倒して場所を空けた、俺達の部屋くらいの狭さ。

その狭い場所で、二人の男が対峙していた。

一人は片手剣ほどの短い柄の大剣を脇から抜き打つ姿勢をとり。

一人は普段剣として携えている長柄の両刃斧を上段に構えて。

俺が見てることに気付いているのか、気付いていないのか。

いや、俺自身も息を潜めてと言うより息が詰まっている。

それほどの緊迫感。

下手な介入をすれば、自分の命を真っ先に刈られるような、恐怖すら抱く空気。

数秒だったのか、数分流れたのか。

二人が動いたのは同時だった。

いや、俺には同時に見えていた。

上段より振り下ろされた斧と、脇から抜き放たれた剣が交錯する。

重く鋭い金属音と共に、一瞬で動き出した二人の影はその刃が衝突したその場で凍ったように動かなくなった。

互角。

相打ち。

俺にはそう見えた。

だけど。

「一歩遅れたな、カケル。」

その言葉に一歩遅れ、地面に一本の刃が突き刺さる。

刺さったのは、両刃斧。

そう。

振り下ろされた手には、斧は無く。

振り抜かれた手には、剣が握られていた。

「……敵わないか、まだ。」

溜息のような一言と共にゆっくりと、二人は凍っていた姿勢を解く。握っていた大剣を腰に下げ、地に刺さった斧を引き抜く。

「追いつかれるにはまだ早いな。追い抜こうなんて、もってのほかだ。」

右目にかかる前髪を少しかきあげ、自信深く笑う男。

それに対し、相手の男……カケル副長は、小さく溜息を吐くと結わいた後ろ髪を指で遊ぶ。

「一度だけとはいえこの条件で勝ったってのは、俺だって信じられないさ……ゼフィス。」

ここで初めて俺は、勝手に覗いていたことに気付いて、慌ててその場を後にしたんだっただか。

それこそ時間なんて感覚はすっ飛んでいた。

ただ純粹に、普段背中を預け合って戦っている二人が、互いを殺すほどの緊張感でぶつかり合っていたという事実。

恐怖と同時に、憧れの意識も強くなったのは確かだった。

あれほどの、

触れただけで斬れそうな気を、

刹那の瞬間すら見切る眼を、

一撃に寄せられた強烈な力を。

俺だって騎士だから。

あの一瞬に見たものに、惹かれていた。

あとで知ったことだが、こうやって朝の訓練前に行う一騎討ちは、ゼフィス隊長とカケル副長にとって不定期ながら大切な行事らしい。

#### 四話 朝と剣（後書き）

次の更新もいつになるか。。。  
読んでいただいている方には申し訳ないです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4103j/>

---

月と血の十字架

2010年10月19日21時00分発行